

# 異言を語ること



W・W・バターソン著  
クライド・ベイド編  
原 鈴 子 訳

# 異言を語ること

W. W. パターソン



## 序 文

異言を伴う聖霊の傾注は、神の霊の超自然的な現象として世界中の注視を集めました。この終末的な世に、聖霊の御臨在とその力が必要なことは言うまでもありません。多くの人々はこの霊の賜物をうけ、クリスチャンの新しい次元的な体験を心から喜んでいきます。この聖霊の満たしを受けるためには、主イエスに身も心もすべて献げて従うことが、前提条件になっています。神はキリストのちしおによって潔められた人々、すなわちすべてを主イエス・キリストにゆだねて求める人々に向け、だてなく与え満たして下さるのです。

W・W・パターソン

## 異言を語ること

### 第一章

異言を語るといふ、しるしを伴ったペンテコステ的な聖霊のバプテスマは、過去のそして又現在の信徒のためのものです。

神の力と霊のすばらしい顕われの一つとして聖書は「異言を語ること」をあげています。主イエスは天に昇られる前、約束として「信じる者には次のようになしるしが伴います。即ち、私の名によって……新しきことばを語り……」と予言されました。聖霊の最初の降臨と共にはじまったペンテコステの日は、使徒行伝の第二章に記してあるように、この特別な現象を事実としてもたらしました。その時以来、初代教会の中にこの顕れをみるようになりました。

「異言を語る」ことは未知の言語を人に語らせる聖霊の力として定義づけることも出来ましょう。神の御計画の中、この素晴らしい神の御力の働きは救世主が出現されるまで、そして聖霊の降臨の時まで、保留しておかれました。たしかにどんな賜物もしるしも、或いは聖霊の働きも、私たちの心が開かれていなければならぬのです。今、私たちは聖霊の時代に生きています。今は心から御霊に従い、その御声に従って満たされた信徒を通して、御霊が御自身を顕わされる時です。

主イエス・キリストは聖霊で私たちにバプテスマをさずけられる方です。主は昨日も今日も永遠までも変わることはない（ヘブル人への手紙十三章八節）ように、主はペンテコステの日に（使徒行伝第二章四節）、また初代教会の時代にされたのと全く同じように、今日も信徒を聖霊で浸して下さるのです。

過去六十年の間にこの地上で神の霊の著るしい働きがありました。聖霊は主の聖徒たちが心の底からの飢えかわきのために熱心に求め、心を合せて祈ったことよって、主イエスが世界中にそゝいで下さったものです。神は昔のように神の子等が聖霊のそゝぎのために叫ぶ祈りをきき、主イエスを通して聖霊の力強いバプテスマを、多くの飢えかわいた魂に与えて下さったのでした。こうしていたる所で幾千幾万もの人々が聖霊の尊い賜物にあづかり、これは又「異言を語る」という超自然的な顕われを伴って与えられたのでした。丁度教会に与えられた最初の聖霊降臨が（使徒行伝参照）この現象を伴っていた様に、最近でも同じ現象が聖霊の傾注に伴っています。

さて、この大切な問題について聖書の御言葉を調べてみましょう。使徒行伝第二章四節には「すると、みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話し出した。」と書いてあります。これは主イエス・キリストが聖霊をもって、バプテスマして下さった最初のものです。バプテスマのヨハネは、この方の来られるのを予言して、自分はその方の靴のひもとくにも足りないとか、この方は聖霊でバプテスマをして下さる方だとか言いました。イエスはヨルダン川で、ヨハネから水のバプテスマを受けられた後、三年半にわたって人々の罪を赦し、病気のいやし、奇蹟など父なる神の力と栄光を数限りなくあらわされたのですが、聖霊でバプテスマをさずけられたことは一度もなかったのです。

しかし、主の死と復活そして昇天された後に、主が聖霊の力強いバプテスマを与えられる方として顕わされる時が来たのでした。主は神の右に坐して栄光を受けられ、父から約束の聖霊を受けられ、それをひたすら待ち望んでいた百二十人の弟子たち（使徒行伝第二章三十三節）にそゝがれたのでした。それは素晴らしい瞬間でした。はじめて神の子が聖霊のバプテスマを授ける者として顕わされたのです。偉大な大祭司

であるイエスが御自身の命令に従って、エルサレムで待っていたあの忠実に求めている信徒、あの貧しい召し出された人々の上に聖霊の油をそ、がれたその不思議を天は見守っていたのです。聖霊はくだりました。弟子たちは満たされました。そして皆、御霊が語らせて下さる通りに異言で語りはじめたのです。

彼等は父なる神の御約束そのものをいたゞいたのです。慰め主は来たのでした。そしてその来臨を、語らせて下さる通りに「異言を語る」ということよって明らかになされたのでした。一体どのように聖霊のバプテスマを与えられるのでしょうか。この力強いバプテスマとは何でしょうか。幸いにもあの聖霊のバプテスマを与えられた日、それは異言を語るという事で始まったことを、天も地も私たちに証してくれているのです。ハレルヤ。聖霊の賜物を受けた者は一人残らず異言を語ったのです。ペンテコステは聖霊のバプテスマを与えるものとしてキリストが立てられた日です。ペンテコステは聖霊の降臨が体験として、現実としてあらわれた日です。又、ペンテコステは主イエスが聖霊でバプテスマして下さる道でもあります。ペンテコステは異言を伴う聖霊のバプテスマの定めであり、型であり、又例でもあるのです。それは後世の信徒たちが、主イエスが聖霊でバプテスマして下さる方法を知るためだったのです。それは先づけるしとして異言を語るという事を伴うことでした。ペンテコステの日の主イエスの御働きによって使徒行伝二章四節に記してあるように、百二十人の弟子たちがそれを体験することになったのですが、それは教会時代の標準、即ち聖霊のバプテスマは先づ異言を語るしを伴うことを全ての人々が知る、という標準でした。信徒はキリストを自分の過越として（コリント人への第一の手紙十五章七節）受取りますが、キリストを自分のペンテコステとしても受取るべきで、丁度百二十人の弟子たちがしたように、上からの力が与えられるまで待望すべきです。そうすれば最初と同じしを伴った、御霊が語らせられるまゝに異

言を語るといふ聖霊の尊い賜物を受けることが出来るのです。

イスラエル人をエジプトから救い出すきっかけとなった二つの大きな事件と体験、その第一は過越です。これは小羊を殺して、救いのために血を流すことでした。第二は五十日後にシナイ山で石の板に書かれた律法を与えられたことです。今日私たちはこれら二つの力強い出来事の成就を現実喜べるのです。

第一は主イエスを過越として受入れることで、その御血が私たちの罪を洗い流して下さるといふ現実的な体験が出来ます。第二は私たちは主イエスを、私たちのペンテコステとして受入れる特権があることです。「インキで書かれたのではなく、生ける神の御霊によつて書かれ、石の板にはなく人の心の板に書かれたものであることが明らかだからです」（コリント人への第二の手紙三章三節）という御言葉があります。私たちは御霊が語らせられるまゝに異言を語る時に聖霊に満たされ、主を実際に体験出来るのです。神は過越とペンテコステの両方を、私たちの生活の中の生きた現実として体験するように願っておられるのです。主イエスを(一)罪からの救い主として、(二)聖霊のバプテスマを授けられる方として知ることが全くすばらしいことはありませんか。あなたは信仰をもつてから聖霊を受けましたか。もしまだならば、偉大なバプテスマをほどこされる方の所に行きましょう。そして主の前に祈って準備をしましょう。そうすれば主は、あなたを神の栄光の中に浸して下さるのです。小羊にハレルヤ。「私が父のもとから遣わす助け主、即ち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊が私についてあかします。」主はペンテコステの日に、主がもはや来られたことを証されたのです。何故ならば主が語らせられるまゝに弟子たちは異言を語り、主の霊に満たされたからです。ですから今日も主が信徒を満たして下さる時に、その聖霊の来臨を同じような方法で証されるのです。飢えかわいて求める信徒が、舌という中々コントロール出来ない

ものをも、全部主の前に投げ出して御心に従うようにするならば、真理の御霊が臨み、主はその来臨を証して、私たちが異言を語らせられることの中に主の御声をきくことが出来るのです。ペテロが御霊に満たされた時、百二十人の異言を聞いて集って来た人々にあのすばらしいペンテコステの説教を語りました。「これは予言者ヨエルによって語られたことです。神は言われる、終りの日に私の霊をすべての人々に注ぐ……」。ペテロが「これは」といったのは、異言を伴った聖霊のバプテスマのことについて語っているのです。勿論この説教の中で使徒ペテロは、人々が聞いた「異言を語る」という超自然的な現象は聖霊の傾注であると述べています。ですからペンテコステの日に顕わされた「これは」ということは、その起ったことの中のどの一つが欠けても予言者ヨエルによって語られた「あの」ことではなくなるのです。終りの時代に於ける聖霊の傾注も又異言の伴うものであるのです。ペテロは又くりかえして、使徒行伝第二章三十二、三十三節に「神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです」と述べています。信者の身体に顕われた聖霊の働きは、異言を語るといふしるしです。父の御約束であり、神の子として崇められるべきイエスによって注がれた聖霊の降臨は見たり、聞いたりすることが出来るものです。聖霊のバプテスマは受ける時には現実的によくわかるものなのです。このことから私たちが、聖霊が注がれる時はその現象ははっきりしたもので、主が語らせられるまゝに異言を語ることを見たり、聞いたり出来るのです。使徒行伝の第二章三十九節でペテロは更に、聖霊の賜物の約束を述べて「この約束はあなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです」と言いました。です

から私たちは異言を語るしるしの伴う聖霊の約束は、今日私たちに与えられているものであることが分かるのです。勿論、私たちは「遠くにいる者たち」です。しかし昨日も今日もいつまでも変らないイエス・キリストは昔聖霊のバプテスマをされたように、今日、私たちにバプテスマを与えたいのです。使徒行伝十章四十四節から四十八節の中にコルネリオの家に集った人々に聖霊の傾注があったことが記されています。ペテロは主イエスについての喜ばしい音信を人々に話していました。そして、「ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者でペテロと一緒に来た人たちは異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。」「彼等が異言を語り、神を讚美するのを聞いたからである。異邦人たちは聖霊の賜物を受けたのです。どうしてペテロや彼と一緒にいた人々は異邦人たちが聖霊のバプテスマを受けたことを知ったのでしょうか。それは「彼等が異言を語り、神を讚美するのを聞いたからである。即ちコルネリオ、彼の親戚又その友人たちが聖霊のバプテスマを受けた証拠は、「異言を語る」ことでした。そこには使徒ペテロや彼と共にいた人々が、これら異邦人は聖霊を受けたのだ、と疑う余地のない現実の、それと一目で分かる証拠があったのです。私たちが聖霊を受けたことについて神のみことばの標準に合う証拠になるものがあります。それは「異言を語る」ということです。今日一人の人が聖霊のバプテスマを受けることをどうして私たちが知るかということは、ペテロがコルネリオの聖霊のバプテスマを受けたことを知った理由と全く同一のことなのです。時には「異言を語る」ということを馬鹿にする様な言葉を聞くのですが、神の霊によって生れた人なら、聖霊の働きについてどうしてそんなことが言えるのか理解に苦しむのです。その様なことばは神の御前に心が頑固になっていることや、真の霊性が欠けていることを示すものです。私たちは聖霊のど

んな働きについても、軽々しい評価をしてはなりません。コルネリオの家族の上に霊が注がれたことに、私たちが異邦人が受入れられたこと、即ちユダヤ人の信徒と全く同じ様に救われて御霊の満たしを受けたことを見るのです。そして主は、異言を語ると言うことを通して、主イエスの福音は異邦人にも自由に宣べ伝えられ、異邦人も主イエスを通して神の御許に来るならば、神はユダヤ人と同じ様に異邦人も受入れられるということを証明するものとして用いられたのです。この様にして私たちは神が「異言を語る」ことを、恵みの福音は異邦人にも自由に伝えられなければならない証拠として大きく評価されていることを知るのであります。これを見ても、私たちは主の顕わして下さったこのことを軽視することは出来ないのです。ペテロがエルサレムにいる使徒や長老たちの集会に出席した時、この聖霊の傾注について、証していました。「そこで私が話しはじめると、聖霊が、あの最初のとき私たちにお下りになったと同じ様に彼等の上にもお下りになったのです。私はその時、主が『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは、聖霊によってバプテスマを授けられる』と言われたみことばを思い起しました。こういうわけですから、私達が主イエス・キリストを信じた時、神が私達に下さったのと同じ賜物を、彼等にもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさることを妨げることが出来ましょう。」この言葉は使徒や長老たちには大変重みのある重要な言葉として聞かれました。即ち、異邦人たちは聖霊の賜物を受けた、そして聖霊はユダヤ人たちの上にくださったのと全く同じ様に異邦人にもくださったこと、それは先づ「異言を語る」というしるしを伴った同じ方法であった、ということです。異邦人たちはペンテコステの日に先づ百二十人が受けたのと同じ賜物を受けたのでした。そしてそれは、異言を語るということに伴った聖霊の賜物であったのです。

使徒行伝の十九章には、エペソの人々は使徒パウロが訪れた時に聖霊を受けたと記されています。パウロが来るまでは、彼等はアポロのもとで福音のメッセージを聞いていました。しかしそれは、色々の点で欠けたことの多いものでした。そこで使徒パウロは彼等に、「信じた時、聖霊を受けましたか。」とたづねました。彼等はそれに答えて、「いゝえ聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした。」といったのです。何という欠陥、なんという必要でしょう。それなのに、多くの人々は今日も同じ様な状態にいるのです。それは福音のすべてが人々に伝えられず、聖霊のバプテスマを受けられるというすばらしいメッセージを人々は聞いたことがないからです。そこでパウロはイエス・キリストの名によって、エペソの人に洗礼をほどこし、「パウロが彼等の上に手を置いた時、聖霊が彼等に臨まれ、彼等は異言を語ったり、予言をしたりした。」のでした。

聖書には、聖霊のバプテスマは先づ異言を語るといふしるしを伴うものであることを三度記しています。これこそ、私たちが深い確信をもって知ることの出来る主の御手から出た完全な証です。「主の御名はほむべきかな」です。この主の御手から出た証を受け入れないことにしましょうか。そうだとすると異言を語る聖霊の完全なバプテスマでなければ、私たちは本当の満足は得られないのではないのでしょうか。どうか主が私たちを助けてその証と御言の雛形に従うものとして下さるようにと祈るものです。そうすることは主を喜ばせ、又私たちの魂も満足を得るようになるのです。

## 第二章

(一)先づ異言を語るといふ聖霊のバプテスマのしるしと、(二)賜物としての異言を語ること。

近年のすばらしい聖霊の傾注の中で異言を語るといふ現象は、数多くの信徒の間で顕わされています。或る人々は聖霊のバプテスマに伴っている「異言を語ること」は、コリント人への第一の手紙十二章、十四章にある「異言の賜物」とは区別される別のものだと思つています。然し他の人々は、聖霊を受けた時に異言を語るとは、聖霊のバプテスマの最初のしるしではなく、「異言の賜物」であるとの見解を支持し、その結果、全部が全部聖霊を受けても異言を語るとは限らないというように考えています。すると次の事柄は非常に大切な問題になります。(一)使徒行伝二章、十章、十九章に記してある「異言を語ること」は聖霊のバプテスマの最初のしるしであつて、コリント人への第一の手紙十二章、十四章で述べられている「異言の賜物」ではないのでしょうか。或いは、(二)使徒行伝二章、十章、十九章にある聖霊のバプテスマを受けた時にあらわれる「異言を語ること」は「異言の賜物」であつて、コリント人への第一の手紙十二章、十四章で述べられているものと同一であり、同じ働き同じ表現なののでしょうか。もし異言を語ることが聖霊のバプテスマの最初のしるしであるならば、このバプテスマを受ければ皆が異言を語ることになります。しかし、もし異言を語ることが聖霊のバプテスマの最初のしるしでなく、ただ「異言の賜物」であるならば、聖霊のバプテスマを受けても全部が全部異言を語るとは限りません。何故ならばコリント人への第一の手紙十二章三十節には異言の賜物について、「みなが異言を語るとしようか、」と記してあり、その答えは「そうではありませぬ」ということになります。この様な立場をとる人々は普通「異言を語る

こと」は聖霊のバプテスマの最初のしるしではなく、又聖霊を受けた人々が皆異言を語るとは限らず、ある人は一つのしるしを、他の人はほかのしるしを受けると考えています。聖霊のバプテスマを受けるしるしとして、或る人は「知恵の言葉」の賜物を受け、他の人は「知識の言葉」の賜物を受け、或いは「信仰の賜物」を又「奇蹟を行う」賜物を、そして或る人は「異言の賜物」等々を受けると言うのです。このようにこの人々の立場は或る人にはある賜物、他の人には他の賜物がバプテスマを受けたしるしになると言うのです。異言を語ることが常に聖霊のバプテスマの最初のしるしであるという見解をもっている人々は、誰でも聖霊のバプテスマを受ければ皆異言を語るのであつて、受霊後に主は知恵のことばや、知識のことばといったような、九つの賜物の中の一つ、或いはそれ以上の賜物が神の御心にしたがつて与えられるという考えをもっています。

そこでこの問題について御言を調べてみましょう。使徒行伝二章四節、十章四十六節、十九章六節に三つの聖霊降臨のことが記されています。そしてこの中の場合も、ある信徒のグループが聖霊のバプテスマを受けています。そして皆一人残らず異言を語っているのです。ペンテコステの日に(使徒行伝二章四節)百二十人の弟子達が聖霊に満たされて、皆、異言を語っています。コルネリオの家ではコルネリオをはじめ、彼の親戚や友人が聖霊に満たされ、すべての人々が異言を語っています。エペソでは(使徒行伝十九章六節)信者たち(人数は十二人でした。七節参照)は聖霊に満たされ、こゝでもやはり皆が異言を語っています。この三つの場合とも、聖霊のバプテスマを受けた人々は皆一度に、同じ時、同じ集会で、異言を語っていると記されています。さて、この異言を語るとは、異言の賜物のことでしょうか。もしそうならば、聖霊のバプテスマを受けた時、全部の人が異言を語るのではないことを認めなければなりません。

そうなるに異言を語ることは聖霊のバプテスマの最初のしるしではなくなります。しかし、もし異言の賜物（コリント人への第一の手紙十二章に列記してある聖霊の九つの賜物の一つ）でないとするれば、これが聖霊のバプテスマを受けた時の最初のしるしであることは、間違いないものになります。

コリント人への第一の手紙十四章二十七節、二十八節には「異言の賜物」について次の様に命じられています。「もし異言を話すのならば、二人か、多くても三人で順番に話すべきで、ひとり解き明かしなさい。もし解き明かす者が誰もいなければ、教会では黙っていないさい。自分だけで、神に向って話しなさい。」さて、この「異言の賜物」に関する定めが、使徒行伝二章四節、十章四十六節、十九章六節にあてはまるかどうか考えてみましょう。(一)使徒行伝二章四節にあるペンテコステの日には、百二十人の弟子達が同時に異言を語っています。所が、異言の賜物に関するルールでは、(コリント人への第一の手紙十四章二十七節)パウロは異言の賜物を用いる時は二人か、多くても三人が語るべきだと述べています。ですから、聖霊のバプテスマを受ける時におこる「異言を語る」とは「異言の賜物」ではなく、聖霊のバプテスマの最初のしるしであると言うこととなります。(二)コルネリオの家で、(使徒行伝十章四十六節)コルネリオや彼の親戚、友人たちはみんな同時に異言を語りました。こゝでも又、これは異言の賜物ではなく、聖霊のバプテスマのしるしであることが分かります。何故なら、もしこれが異言の賜物であったとしたら、一度に一人だけが話すべきですが、こゝではグループの人々が一度に異言を語っています。(三)エペソでは(使徒行伝十九章六、七節)信者のグループ十二人が一度に語っています。こゝでも又、これが異言の賜物ではないことが分かります。もしそうであれば、一度に一人づゝエペソ人が語り出したはずで、ですからこれは聖霊のバプテスマの最初のしるしとしての異言を語っていることとなります。神の御言葉は、

この問題については全く疑う余地を残していません。聖霊のバプテスマを受けた時に語る異言は最初のしるしとしてのもので、聖霊の九つの賜物の一つとしての異言の賜物とは違います。父なる神は子なる神、主イエスを私たちの救い主として与え、私たちはイエスを神の賜物としていただきます。私たちが神の子、主イエスを受け入れた後、主は異言を語るという最初のしるしと共に、聖霊の賜物を与えて下さいます。この聖霊を受けた後、聖霊はその九つの賜物の中の一つかそれ以上を、私たちに与えようと願われるのです。この賜物とは(一)知恵のことば、(二)知識のことば、(三)信仰、(四)いやしの賜物、(五)奇蹟を行なう力、(六)予言、(七)霊を見分ける力、(八)異言、(九)異言を解き明かす力です。(コリント人への第一の手紙十二章一節、十一節)信徒が聖霊のバプテスマを受けたら、最初のしるしとしての異言を語りますが、これは「異言の賜物」を受けたというではありません。何故なら、先に学んだ通り聖霊のバプテスマを受ける時に語る異言は「異言の賜物」と異っているからです。多くの人々が聖霊を受けて異言を語りますが、異言の賜物を受ける人は多くはありません。しかし、異言の伴う聖霊のバプテスマを受けた後で異言の賜物も受け、色々の折にこの異言の賜物を用いる人々もあります。信徒が異言の賜物を受けると、その賜物を自分の意志によってつかうことが出来ます。それは、自分が語りたければいつでも異言を語ることが出来るということです。しかし、その語るとは聖霊の御力のもとその導きのもとでのみ行うべきです。神が私たちにゆだねて下さったものですから、異言の賜物は心してつかい、決して乱用してはなりません。願わくば主が私たちを助け、みまえを静かに心して歩かせ、すべてのこと御声に従わせて下さいます様に。神御自身に栄光がありますように。また私たち己れを十字架につけ、キリストを崇めることが出来ます様に。

更によく調べますと、ペンテコステの集会では全員が異言を語り、コルネリオの家の集会でも全員が異



言を語り、更に同じことがエペソでもありました。(使徒行伝十九章六節)ところが異言の賜物は、一つの集会では、多くても三人が異言を語ることになっています。もし、ペンテコステの日に語った異言が、「異言の賜物」であったのなら、三人以上の人が異言を語るようなことはなかったはずですが、それは異言の賜物ではありませんでした。何故なら百二十人全部が異言を語ったからです。それは聖霊のバプテスマの最初のしるしであったのです。コルネリオの家やエペソで起ったことも全く同じことが言えます。もし或る集会で三人の人が、異言の伴う聖霊のバプテスマを受けたとします。その時そこに牧師がいて、聖霊の賜物として異言を信じていたとすると、その牧師は他の人がそれ以上異言の伴うバプテスマを受けないように、とめなければならぬことになります。こうしてこの様な立場をとる牧師は、一つの集会では三人以上異言を伴う聖霊のバプテスマを受けることを許せません。他の人々は皆黙っていなければならぬのです。もしその様なことが起って、二人が聖霊のバプテスマを受けた後、もう二人が同時に受霊したとすると、牧師はこの二人の中のどちらかを止めなければならないし、決めるのに大変迷うようなことになりません。勿論これは馬鹿げたことです。こういうことから考えても、使徒行伝に記されている聖霊のバプテスマを受けた時に語る異言は「異言の賜物」であるという見解は、話にもならないことがわかります。実際そのようなことはあり得ないことです。これはやはり聖霊のバプテスマを受けた最初のしるしであるのです。

そればかりでなく、コリント人への第一の手紙十四章二十七、二十八節には、異言の賜物について「ひとりは解き明かしをしなさい。もし解き明かす者が誰もいなければ、(異言の賜物を用いる人は)教会では黙っていないさい。自分だけで、神に向かって話さない」と述べていることに気がつくのです。ですから、

ら、「異言の賜物」が用いられる時は人にはわからない言葉で語るこの異言の解釈が「異言のメッセージ」として、皆がその言葉がわかるように語られなければなりません。コリント人への第一の手紙十四章五節と二十八節。もし異言で語られたことを人々に理解させる異言をとく賜物をもっている人が誰もいない時は、異言の賜物をもっている人は黙っていて、自分自身に、或いは、神にむかって話さなければならぬのです。さて、このルールが使徒行伝二章、十章、十九章にある異言を語ることに適応出来るかどうか見ましよう。もしこのルールがペンテコステの日のことに適応されたとするならば、一人の弟子だけが異言を語ることが出来たはずでした。そうして聖霊御自身が、コリント人への第一の手紙十四章二十七節、二十八節に定めているルールに従って、異言の意味を説明することが出来る誰かが「異言を解く賜物」を使つたはずなのです。しかし実際はそうではありませんでした。何の異言の解釈もされなかったのです。弟子のうち誰も、コリント人への第一の手紙十四章二十七節、二十八節に与えられているルールに従って、解釈が与えられるのを待ったものはいませんでした。

### 何の理由のために？

ペンテコステの日に語られた異言は、「異言の賜物」ではありません。したがって、コリント人への第一の手紙十四章二十七節、二十八節のルールにしばられていません。反対にペンテコステの日に語った異言は、聖霊のバプテスマを受けた最初のしるしなのです。ペンテコステの日に起ったことは、同じ様にコルネリオの家でも(使徒行伝十章)またエペソでも(使徒行伝十九章)起りました。そこで異言を語った時、誰もその異言の解釈を待ってはいなかったのです。皆が同時に主をあがめ、たたえていたのです。御

言葉の中にこの真理をはっきりと示され、誰も誤解しないで聖霊のバプテスマはいつも、最初のしるしとしての異言を伴っていることを、皆にわかる様にして下さいました。「主の御名は、まことにほむべきかな。」です。

更に、ペンテコステの日に語った異言を、「異言の賜物」として考えることは大変無理なことです。もし賜物であったとすると、ある人が異言を伴うバプテスマを受けたならば、その異言を語り終って、その訳が与えられるようにしなければなりません。その後にはじめて次の人が異言の伴うバプテスマを受けられる、ということになります。そして、三番目の人が異言の伴うバプテスマを受ける前に、二番目の人は異言を語り終ってその解釈がされなければならないのです。こんなことはあり得ないことです。これから考えても、聖霊を受けた時に語る異言（使徒行伝二章、十章、十九章）は、異言の賜物ではなく、聖霊のバプテスマを受けた最初のしるしであることは明らかです。

この角度から問題を取扱うのを終る前に、もう一つ述べておきたい事があります。もし受霊の時に語る異言が、「異言の賜物である」と主張するとします。そして或る集会で、もし三つの異言によるメッセージがあり、又それぞれの異言の訳が与えられたとすると、もうそこでは異言の伴う聖霊のバプテスマは誰も受けることは出来ません。即ちそれは、多くの人々が単純に考えて支持している様に、この異言を語ることが異言の賜物だとしますと、コリント人への第一の手紙十四章二十七節、二十八節は、一つの集会ではただ三回だけか異言の賜物を用いることを許していないということがあるからです。

次に記すリストは聖霊のバプテスマの最初のしるしとしての異言（使徒行伝二章、十章、十九章）と、聖霊の九つの賜物の一つである異言の賜物（コリント人への第一の手紙十二章、十四章）の違いを、一目

でわかるようにしたものです。

<p>聖霊のバプテスマの最初のしるしとしての異言を語ること</p> <p>使徒行伝二の四、十の四十六、十九の六</p> <p>一度に皆が語る</p> <p>一つの集会で皆が語る</p> <p>皆が異言の解釈なしで語る</p>	<p>聖霊の九つの賜物の中の一つとしての異言の賜物</p> <p>コリント人への第一の手紙十二章、十四章</p> <p>一度に一人づゝ語る</p> <p>一つの集会で多くても三人だけが語る</p> <p>各々の異言は訳が伴わなければならない</p>
--	--

このように私たちは、使徒行伝二章、十章、十九章は受霊のしるしとしての「異言を語ること」をあらわし、コリント人への第一の手紙十二章、十四章は教会で用いられていた異言の賜物を示しているのだということがわかります。

### 第三章

ペンテコステの聖霊のバプテスマは、キリストの死と甦りが起る以前には与えられませんでした。

ザカリヤ（ルカの福音書一章六十七節）、エリサベツ（ルカの福音書一章四十一節）、バプテスマのヨハネ

(ルカの福音書一章十五節)、イエスの母マリヤ(ルカの福音書一章三十五節)といった人々は、皆聖霊で満たされていますが、聖書には異言は語らなかった様に述べられています。マタイの福音書三章十三、十四節を読みますと、「さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに来られた。しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして言った。私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが私の所においでになるのですか。」とあります。ヨハネはその頃群衆に向って、聖霊でバプテスマされる偉大な方が間もなく現れることを話していたのでした。彼は、「私はあなたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私の後から来られる方は、私よりも更に力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方はあなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」(マタイの福音書三章十一節) こういうわけで、ヨハネが自分こそ、イエスからバプテスマを受けなければならないと言ったのは、ヨハネは旧約聖書に記してある聖霊によって満たされていたのですが、主イエスからペンテコステの聖霊のバプテスマを与えられる必要を感じていたからです。そして、そのバプテスマとは異言を語るしを伴ったものです。ですから、ヨハネは聖霊によって満たされてはいましたが、それは主が死んで甦えられ以前の霊を受けていたのであって、今私たちの大祭司である主イエスが、私たちに与えて下さる聖霊のバプテスマは受けていなかったのです。これはザカリヤ、エリザベツ、マリヤ、それに旧約聖書に出てくる人々についても同じことが言えます。即ちその人々は聖霊で満たされていたのですが、完全な聖霊のバプテスマは受けていませんでしたし、当時は受けてたくても受けることが出来なかったのです。

聖霊のバプテスマは教会の時代のためにとっておかれたのです。そして、それがイエスによってペンテ

コステの日に初めて与えられたのでした。これはヨハネの福音書七章三十七―三十九節にはっきりと記されています。「さて、祭りの終りの大いなる日に、イエスは立って、大声でいわれた。『だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。』これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。』こゝに主のみもとに来るように、そして聖霊の水を飲む様にとり、キリストの有難いまねきがあります。けれどもまだイエスが栄光を受けておられないので、聖霊はまだ降っていませんでした。イエスは、私たちの罪のためにカルバリで死ななければならなかったのです。それは、主があつた打たれた岩(出エジプト記に記されています)になり、そこから御霊の水が流れ出るためでした。イエスは、父なる神の右に坐って栄光を受け、そして約束の聖霊を受けられなければならないのです。そうして後、はじめて聖霊が与えられたのです。この様にみますと、主の死、甦り、昇天以前に主を信じていた人々は、まだ主が栄光を受けておられなかったのですから、聖霊の賜物が受けられなかったことが分かります。しかし、キリストの昇天以後は主イエスを信じる全ての人々が、聖霊の賜物を受けられるという特権が与えられたのです。そして、私たちの心の奥底から、御霊が川のように流れ出る時、私たちは御霊が語らせられるまゝに異言を語り出すのです。聖霊のバプテスマを与えて下さる偉大な御名に祝福がありますように。神の岩、即ちキリストは(コリント人への第一の手紙十章四節)群衆が水を飲む前に先づ打たれなければなりませんでした。(出エジプト記十七章六節)私たちが聖霊のバプテスマを受ける前に、キリストは死ななければならなかったのです。今は、モーセが岩に命じたように(民数記二十章八節)、岩にむかって語

りかければよいのです。そうすれば聖霊の水が与えられるのです。キリストに語りかけなさい。御名を呼びなさい。そして、上からの力を与えられるまで待ち望むのです。そうすればキリストは、父なる神の約束をあなたに送って下さるのです。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい、そうすれば見つけられます。たたく者には開かれます。あなたがたの中で、子どもが魚を下さいという時に、魚のかわりに蛇を与えるような父親が、いったいいるでしょうか。卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありましよう。」(ルカの福音書十一章九―十一節)

#### 第四章 イエスの母マリヤ

イスラエルの処女マリヤには、イエス即ち神の子の母となるというユニークな特権が与えられました。神の聖言の受肉はめぐまれた処女の体の中で起りました。父なる神は聖霊の覆いと力とで御子を誕生させられたのでした。マリヤは受胎を天使ガブリエルの口を通して、「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます」ときかされたのです。まことにマリヤの胎内に宿ったのは聖霊によるものでした。(マタイの福音書一章二十節)たしかに、マリヤは不思議な聖霊の力が自分に臨んだことを感じたのです。聖霊の支配のもと、自分の体がいと高き方の力におおわれたことに間違いはありませんでした。何という不思議でしょう。聖なる受肉、天と

地の触れ合い、神が人となること、神と人とがイエスの肉体の中に一つとなること、小羊に栄えあれ、ハレルヤです。それから三十三年の月日がすぎ、マリヤは自分の息子の十字架の前に立ってその死をみただけでした。しかし、キリストは死から甦えられ、弟子たちに聖霊の賜物が与えられるから、エルサレムで待つようにと命令され、その後天に昇り、神の右に坐せられたのです。その命令を守って百二十人の弟子たちはエルサレムで待ち望みました。彼女も他の弟子たちと一緒に祈って、聖霊のペンテコステ的なバプテスマを待ち望んだのでした。彼女にもペンテコステ的な体験が必要だったのでした。栄光に満ちた息子さんある主イエスから来る聖霊の力強いバプテスマを受ける必要があります。ですから彼女もまた上からの力を与えられるまで待ち望む必要があったのです。このように私たちの主の母マリヤが、聖霊のバプテスマを必要としていたとすれば、当然あなたにとっても必要なことだとお感じになりませんか。マリヤは教会時代の標準に満たない、昔の不完全な体験に満足せずへりくだって求道者の立場をとったのでした。弟子たちは、「婦人たちや、イエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ祈りに専念していた。」(使徒行伝一の十一)「五旬節の日になって、みなが一つ所に集っていた。すると突然、天から激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響きわたった。また、炎のような分れた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みな聖霊に満たされ、御霊が語らせてくださるとおり、他国のことばで話しました。」(使徒行伝二章一―四節)ペテロ、ヤコブ、ヨハネ又他の弟子たちは聖霊に満たされて異言を語りました。そして、イエスの母マリヤも同じでした。いまやマリヤは教会時代のどの信者にも与えられる体験の中に入れられたのでした。即ち信徒がマリヤの手に従って、丁度彼女がペンテコステの日に御霊の語らせられるまゝに異言を語る聖霊を受けたのと同じように、御霊

の語らせられるまゝに異言を語るまで待ち望むならば、教会時代の信徒になら誰にでも与えられる普遍性をもった体験だったので。願わくば主が、主の母を浸して下さったように、私たちも聖霊でバプタイズして下さいますように。主の御名を讃美いたします。

## 第五章

来たるべき時代の保証としての聖霊のバプテスマ

聖霊のバプテスマのことを示す、いろいろの用語が聖書の中に使われていますが、その中に「保証」という言葉があります。それは見本とか来たるべき事を前もって味わうという意味があります。パウロはエペソの人々に手紙を書いてキリストのことをのべ、「またあなたがたも、キリストにあつて、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによつて、約束の聖霊をもつて証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。」(エペソ人への手紙一章十三、十四節)と書いています。コリント人への第二の手紙一章二十一、二十二節には次のように記してあります。「私たちをあなたがたといつしよにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。」と。又、コリント人への第二の手紙五章五節で、パウロは主の再臨の時に信者がいただく栄光の体のことを書いて、「私たちをこのことになう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。」と言っています。聖霊のバプテスマは御霊の保証なのです。これは御国を受け継ぐことの保証で、神の民の贖いのためであり、

又これはキリストが千年王国を支配するために再臨される時、私たちの体は栄化されますが、それを今、前以つて味わうのが聖霊のバプテスマだと言ふことが出来ます。又このバプテスマの中で、私たちは来たるべき千年王国のすばらしさを味わうのです。聖霊によつて私たちの全存在がゆり動かされ支配されるまで、主イエスによる聖霊の中に沈められ、浸され、バプテスマされるのは全くすばらしいことではありませんか。何という聖なる感動、何という霊の恍惚感、何という栄光また祝福でしょう。私たちが御霊が語らせられるまゝに異言を語る聖霊のバプテスマを受けると、主の力強い甦えりの力によつて私たちの全存在が生かされ、肉体までもこの力にふれて新しくなるのです。しかしこれはただ主イエスが再臨される時にいただくことの味見であり、保証であり、見本であるだけです。

さて聖霊のバプテスマ、即ち保証(見本または味わい)を受けると聖霊が語らせるまゝに私たちは異言を語ります。これが見本であるなら、その完全なものも見本とあまり変らない、ただそれ以上のものだと言うだけです。そこで、「主は、号令と御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まずはじめによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといつしよに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになりす。」と云うことが起るので。 (テサロニケ人への第一の手紙四章十六、十七節)キリストを信じて死んだ信徒のすべての体は死から甦えり、墓の中から出てきて神を讃美します。その言葉は日本語や英語、中国語、スペイン語といった国語、または全世界の他の国の言葉や地方なまりなどではなく、その甦えりの日に神からいただく新しい言葉で讃美するのです。勿論私たちは間違ひなく、御霊が語らせるまゝに主をあがめ、「異言を語る」のです。その後私たち

は自分たちの栄化された体と霊との中に、聖霊の完全な恵みの中に入るのです。今は私たちの地の塵の器である体は聖霊のバプテスマが注がれても、神の栄光を容れるのに充分だとは言えませんが、栄化された体に変われれば、神の栄光と霊のすべてを容れることが出来るでしょう。主を讚美しましょう。全くすばらしい未来、すばらしい希望、靈感です。キリストのような姿に変わって天国に目ざめたら私たちは本当の満足に浸れることでしょう。「主イエスよ来たりませ、アーメン」こうして、私たちは「異言を語る」ことが聖霊のバプテスマの最初のしるしであるとして、もう一度認識をあらたにするのです。何故ならばもしキリストが私たちを墓の中から呼び出される時に、甦える私たちみんなが新しい言葉を語るのならば、同じように今、聖霊のバプテスマを受ける時みな新しい言葉を語るはずです。一つは完全なものでありもう一つはその保証としてであって、保証と一緒にあるものは完全なものとも又一緒であるはずです。ですから共に私たちの主、創造主、贖い主、聖霊でバプテスマして下さる方の御前にひざまずいて、この御国を受けつぐことの保証を、聖霊のバプテスマを与えて下さいとお願いしましょう。そしてそれをいただく時、私たちは御霊が語らせるまゝに異言を語るのです。

御神に栄光あれ。

## 異言を語ること

昭和46年6月30日 印刷発行 1971 ©

著者 W・W・パターソン  
発行者 クライド・ペイド  
印刷所 新生運動協力会

落丁・乱丁の際はお取り替えいたします。

